

図像学・イコノロジーを踏まえたヴィジュアル・リテラシー教育の諸問題 —— ボッティチェッリ作《春》の研究史を通じて ——

専攻 教科・領域教育学
コース 芸術系(美術)
学籍番号 M08216F
氏名 東原 幸代

1. 研究の目的

近年、美術科教育では「鑑賞」が重視されている。しかし一般によくみられるような「感性的」な鑑賞では不十分だろう。芸術は感性のみによって制作されるのではなく、人間のもつ能力や技術、同時代の社会的条件などのもので生み出されるのであり、それらを総合的に理解するには、鑑賞者も多少の知識や洞察力が必要である。美術史学にはさまざまな研究方法があるが、以下の3つは、知識や洞察を伴う理解と鑑賞をするうえでは定番となっている基礎的な研究方法といえるだろう。(1) 視覚造形作品から、その作品の造形特徴や様式を見定める研究・分析すなわち形式分析、(2) 文献資料や先行作例との比較により、作品に表されたモチーフや主題の同定・特定をはかる、例えば図像学的研究、(3) 視覚造形作品の内に含まれる精神的、観念的な意味を探り、人類の総合的な歴史の中に作品を位置づけるイコノロジー研究である。古い美術に関しては図像イメージを読み、解釈するということが重要であり、実質同様のことが近現代美術においても求められるだろう。

そこで本論では、とくに図像学やイコノロジーという研究の手法とその成果、それらの教育普及のあり方について考察することにした。一例として、多くの解釈研究が進められているサンドロ・ボッティチェッリ作《春》の研究史を中心に考察を進め、さらには新たなヴィジュアル・リテラシー教育の方向性について考えることにした。

2. 論文構成

はじめに

第1章 図像学とイコノロジー

第1節 図像学とは何か

第2節 パノフスキーのイコノロジー研究の方法論

第2章 《春》とボッティチェッリ研究の夜明け

第1節 ヴァザーリの『ボッティチェッリ伝』と《春》の来歴

第2節 ボッティチェッリに対する再評価

第3章 《春》をめぐる研究の展開

第1節 ヴァールブルクの研究

第2節 ネオプラトニズムに基づく解釈

第3節 イコノロジー研究の成果と限界

第4節 「祝婚画」

第4章 美術史学研究の成果とその教育の問題

第1節 美術史学研究の多様性と流動性

第2節 視覚芸術作品に対する理解と教育

第3節 「鑑賞」のための「ヴィジュアル・リテラシー」教育概念

おわりに

3. 研究の内容

現在一般に、ボッティチェッリ作《春》(フィレンツェ、ウフィツィ美術館)は、フィレンツェを支配した15世紀後半のメディチ家を中心とするサークルの人文主義的な思想と結びつくものとされ、その主題解釈をめぐるのは、ネオプラトニズムの思想に基づく読み取りなど、さまざまな説が提出されてきた。美術史学においては、図像学と文献考証とに基づくイコノロジー的研究をはじめとする諸研究が大きな成果をあげてきたといえることができる。第1章では、E・マールの研究より図像学が方法論として発展した経緯や、E・パノフスキーが著書『イコノロジー研究』(1939年)の中で論じた3段階の方法論について概観した。

第2章では、《春》の来歴に立ち戻り、ボッティチェッリが19世紀以降に再評価され、そこから研究が始まった経緯について述べる。ボッティチェッリ(1444/45-1510年)について、同時代の記録は少なく、《春》に言及する古い文献は、16世紀のG・ヴァザーリによる『芸術家列伝』(1550、1568年)のボッティチェッリ伝である。それによるとフィレンツェ郊外、カステッロのメディチ家所有のヴィッラ(別荘)にボッティチェッリ作の絵が2点あり、1点は《ウエヌ

スの誕生》で、もう1点は「ヴィナスが美の三女神によって花の冠を授けられているところの絵」で「春」を表していたという。だが、実際の《春》の画面にそうした描写はない。ヴァザーリの記述には誤りがあり、《春》という主題にも不確かさが残る。ボッティチェリは、ちょうどレオナルド、ラファエッロやミケランジェロらが活躍した盛期ルネサンスの時代に世を去ったため、人びとの彼への関心は薄れ、多くの情報が失われていった。

ボッティチェリに対する再評価が進むのは、19世紀後半のラファエル前派運動がおこったイギリスであった。なかでも美術評論家W・ペイターが著書『ルネサンス』（1873年）において、当時は「プリミティヴ」なものとみなされていた初期ルネサンスの美術、特にボッティチェリを称揚したことにより、その作品は高く評価されるようになった。《春》をめぐる研究が、19世紀から美術史学の興隆とともに展開してきたことに注意をしなければならない。

第3章では《春》の研究史とその展開を検討する。A・ヴァールブルクは、論文「サンドロ・ボッティチェリの《ウェヌスの誕生》と《春》」（1893年）において、古典古代のイメージがルネサンス期のイタリアにおいてどのように再生したのかを、古典古代および同時代の文学との関連で読み解き、初めて両作品の人物モチーフの同定を行った。このような各種の文献を基に象徴を読み解く方法は、後の研究に大きな影響を及ぼした。E・H・ゴンブリッチ、E・ウイント、E・パノフスキーらは、《春》について同時代のメディチ家周辺の人文主義者たちの思想であるネオプラトニズムに基づく解釈を行い、多くの研究者がこれに続いた。

しかし、これらの研究の問題点がないわけではない。メディチ家に庇護されたごく少数の知識人たちの難解な思想を絵解きするためだけに、この絵画は描かれたのだろうか。ラテン語その他の高度な学識をもっていなかった人びと、たとえばメディチ家の女性たちは、この絵画をどのように見ることができたのだろうか。

1975年にメディチ家の財産目録（1499年）が発見され、フィレンツェ市内ラルガ通りのメディチ本家のパラッツォ（宮殿）に続くロレンツォ・ディ・ピエルフランチェスコ・デ・メディチ邸内の、彼の寝室に続く前室のレットウッチョ（寝椅子型寝台）の上方に「9人の男女からなる絵」、つまり《春》があったことが明らかになっている。

《春》が寝室内を装飾する世俗主題の絵画であり、家族

の慶事である結婚を記念して描かれたとするなら、新婚夫婦のための祝婚画としてこの絵画がどのような意味を担っていたのか、花嫁や女性たちがこの絵画何を読み取りえたのかを、さらに考える必要がある。《春》がロレンツォ・ディ・ピエルフランチェスコとセミラーミデ・アッピアーニの結婚を機会に依頼されたとする説をもとに、《春》の図像細部を15世紀のフィレンツェの結婚儀礼や慣習に結びつけて具体的に考察した。結果、近年では《春》は花嫁に対し人文主義の教えを与えると同時に、花嫁や女性たちに対しては貞淑な振る舞いや、夫への服従という美德を与えており、出産と結びつけられ、妻に対する教訓を示した絵画としての役割を担っていた、という解釈研究がなされていることがわかった。（L. Zirpolo, 1992）

第4章では、前章までの美術史学研究の多様な展開を振り返りながら、視覚芸術作品に対する理解と教育の問題について述べる。近年の、美術教育における「鑑賞」は、美術史学の研究成果から作者や作品に関する知識や見方を習得するような従来の鑑賞に対して、「鑑賞者」の主體的な解釈を重視する傾向が高まっていると言える。鑑賞者が芸術作品を分析的に見て、自分の言葉で解釈する能力を「ヴィジュアル・リテラシー（Visual Literacy）」（視覚的な読み書き能力）といい、この能力を高めるような指導が求められるだろう。視覚芸術作品において、アトリビュート等に着眼した人物の同定や、象徴や寓意から主題を読み取る図像学的分析から、作品の本質的な意味や内容に関わるイコノロジー的な解釈の段階に近づくにつれ、鑑賞者の総合的な直観により多様な解釈が可能であるといえる。今後の課題として、このような研究方法を用いて、ヴィジュアル・リテラシーを高めるような鑑賞の指導を模索し、実証研究を構築していくことが必要であると考えられる。

4. 主要参考文献

- E・パノフスキー著『イコノロジー研究』、瀧徹・阿部耀・塚本雄・永瀬・福部謙訳、ちくま学芸文庫、2002年。
- A・ヴァールブルク著『サンドロ・ボッティチェリの《ウェヌスの誕生》と《春》』、伊藤朝明監訳・富田保文訳、ありな書房、2008年。
- R・ライトボーン著『ボッティチェリ』、森嶋之・小林もり子訳、西書房、1996年。
- Lilian Zirpolo, Botticelli's Primavera, A Lesson for the Bride, in Norma Brude and Mary D. Garrard (ed. by), *The Expanding Discourse: Feminism and Art History*, New York, 1992.

主任指導教員 喜多村明里

指導教員 初田 隆